表題＝ぶらり、「西荻」

副題・・・（良き風景を求めて）

今日は外を見れば久しぶりに晴れ上がり、爽やかな日よりなので、家内を連れ出すのには、とてもつごうが良いと思い立ち、昼を少々過ぎたあたりに、支度をして家内と連れ立ち車で出かけることにする。（車は、先月この仕事のために新たに購入した、「ベンツ300E です」）

今日の光の加減かもしれないけれど、得てして、買い物の「日」選びには、やはり光が大事でないかと私は何時も気が付くのであります。光が良くて、其れに加えて風が無風であればこれ以上の吉日はない。

私も以前から西荻界隈の古物、骨董等が気にかかる事があり、一度は観に行きたいと願う気持ちはうずうずと腹のそこで温めてはいたけれど、其の時が到来すると、我ながらに逸る気持ちを抑えるのに、如何したら家内に見透かされないようにと、気を使うのが難しい。

いざ出るとなると「女」は、あれを着て見てはとか時間のかかること、30分ぐらい待たされて、車の中で私はいらい

らしながら待つ時間の永さときたら、男で良かったと思うその時出て来た家内の姿を見て私は、車のエンジンを切り外に飛び出すありさま、「なんだその姿は」突然目の前に現れた美人妻は、私の五十年来の良き伴侶である。何と和服姿で私の目の前で「ニコニコ」としているではないか、其れも嫁に来てから一度も仕付をとらずにおいたあの縦縞の着物である。君その姿は、突然目の前に現れた妻に怒る気持ちも綯えてしまいがちで、暫し呆然として佇む有り様。

身支度を終えている家内に小言も野暮だし、手回りの持ち物など気を使いながら、車に家内を乗せてから、自分の身の回りを見たら、先程の騒ぎで自分はサンダル履きにて乗車している始末、これは又失礼。

家内は縦縞のお召しを着て、私は「さむえ」を着て、いざ

西荻を目指してエンジン始動。処が又である、「貴方忘れ物が有るので車をとめてください、貴方の財布が机の上にまだありましたよ」、私が忘れた財布の中身は家内には秘密である、「ああ俺が取りに行くよと一言」、車から降りて先程家内が閉めて出て来た入り口を開けて帳場箪笥の所に来て私はニヤニヤとしていると、先程縦縞の御召しを着た美人が「私の財布もと」周りなど気にせずに、大きな声を張り上げて催促をしている、車から降りてこないのを見てから、私は家内の財布の中身を確かめて度肝を抜かれた、万札で二十五枚程が覗いているではないか、やはり吾が女房である。

「貴方あたしの財布は有りましたか」、私は中身を見た都合上無言で財布を手渡した。

「貴方中身を見たでしょう」、

「そんな事はしていないよ」、私は彼女に顔色が変るのを悟られないようにして、運転席

のドア―を開けて素早く座席に座ると、後ろの席で何やら財布を確かめる仕草をしている家内が、ルームミラ―の中の私に、「貴方財布の中身は？」、眼で合図をしているので、私はとぼけて、矢張縦縞は見て良し、着て良しだねと、私も自分の家内が小奇麗にしてくれた御礼に、少々日ごろは使わない誉め言葉など掛けてやりながら自宅前を離れる。
　車が動き出すのを見てから、彼女いわく、「貴方も背広にしたら良かったのに」、今更何を、人に運転させておきながら自分は縞模様なのに、咽喉の奥から今にもある言葉が出始めたけれど、今日の天気に免じて、我慢。夫婦は狸と、狐の化し合である、長年の男と女の駆け引きの凄さが、そして又其の極め細やかなる素振りまでもが、お互いの人生を変えてしまう。そんな互いの腹の中を探りながら、車は西荻の北口に差しかかり、後ろの座席から一声「車を止めて、運転手君？
あらごめんなさい、ついあまりにもいい車だから」そうでした、今日は何時もの車両とは違うのに乗っている事を私は忘れていました。私が後ろを振り返ると、美人妻は窓の外を見ながら、「アレハ」の一言、見れば古物を扱う店の前に何やら形が悪いけれど重そうな石の固まりが置いてあり、色艶もなかなかの物である。縦縞の美人妻が又もや、「貴方、アレは硯ではないでしょうか」と当の奥様が車から降りる気配に
私は家内を静止してから、俺が見てくるからと車から降りて
其の石の塊ににじり寄り、私は家内のほうを見て手招きをして、車の中の美人さん財布をと、大きな声を張り上げていた
其れもそのはず、店先の台の上で車の排気ガスに曝されて、
粗末に置かれていた「物」は何と、あの「幻」の硯ではないか、それも以前から家内が探していた、「端渓」の硯である。
　私が硯の前でニヤニヤしていると、後ろに何やら人の気配なのに振り替えると、車からいつ降りてきたのか縦縞の美人が私の肩越しに、「石の塊でしょう」の一声で、吾に返り、ああ只の石だよと言いながら、「おい声がでかいぞ」、これを見なさい、端渓の硯だ君が以前から欲しくて捜し歩いていた硯だよ、「え、此れがあの端渓」、既に縦縞の御方は声も違うし顔色も上気して赤ら顔になって、手には早々と万札が入っている財布を持っているではないか、そんな二人が店先で騒いでいるのを、店の奥から覗きながら見ていた店主が近寄りながら「その硯は宜しければお持ちくださいませと」、声を掛けてきた、私の後にいた美人妻が突然「如何程ですか」、
其の声がすっとんきょうな声だから当の店の主人は後ずさりをする有り様で、「五百円程下されば」宜しいですよ、以前から置いたままで店の中に置き換えるにも重たくて私の細腕では日毎出し入れするのが大義で成りませんから何方かがお持ちいただけるのを心待ちにしていましたので、お客様がお気に召されたので有ればどうぞお持ちくださいませ、
其の言葉が消えるのも待ちきれずに、財布から一万円札を出す美人妻、それに気が付

いた私が俺の小銭を使うからと手にしている小銭が「百円玉、十個」懐の中で弄りながら準備をしていた私が、店主に此れでいいですかと手渡した百円玉十個。其れを見た店の主人、お客さん五百円でいいですから此れはお返ししますと半分の百円玉「五つ」を縦縞の彼女に手渡しているのを見て私は空かさず残りの分は私共の気持ちですからと店の主人に押し返して早々に其の店を離れてから私は例の縦縞美人に此れは凄い買い物をしたから今日は此れにて帰ろうと促した、処が美人妻曰く

以下は次号にて、詳しく。

書き手は、JA1EIR。